

レ・ミゼラブル
(3)

世界文學全集



LES
MISÉRABLES

Victor Hugo

著—ゴーユ・ルトクィヴ

ルブラゼミ・レ

卷 三 第

譯 雄 志 與 島 豊



作 シ ギ ロ

版 出 社 潮 新

非賣品

世界文學全集(14)

第十三回配本

レ・ミゼラブルは
本巻にて完了す

(三) ルブラゼミ・レ

昭和三年三月五日印刷
昭和三年三月十五日發行

翻譯者 豐島與志雄

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

一八八八八
二〇〇〇〇
四九八七六
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 說

一、「死刑囚最後の日」

「死刑囚最後の日」はウィクトル・ユーゴーの千八百二十九年の作である。丁度作者は數へ年で二十八歳、身心共に元氣潑刺たる時であつて、既に詩集二冊と戯曲「クロンウエル」とを發表して、ロマンチック運動の先頭に立ち、翌三十年には、戯曲「エルナニ」の公演を機縁とするロマンチック運動の勝利を齎らし、それから相次いで多くの詩集や戯曲を發表するといふ、輝かしい未來を前途に望み、創作慾の旺盛な時であつた。

彼はこの一篇を書き上げて、自分の名前を入れずに、無名の者の作として世に問うた。このことに就ては、其後千八百三十二年に彼が公然と假面をぬいで書いてゐる長い序文を譯出しておいたから、茲に改めて云ふ必要はないだらう。そしてこの作が發表された當時、政治道德並に文學上の反響を——といふより寧ろ驚異的物議を——如何に多く捲き起したかは、作者自身で千八百三十二年に書いてゐる「或る悲劇に就ての喜劇」といふ小篇でも、ほど推察することが出来る。——序に云ふが、この「或る悲劇に就ての喜劇」は、「死刑囚最後の日」の一種の序文മായうなもので、引離すことの出来ないものとはなつてゐるが、「死刑囚最後の日」の文學史的研究に役立つだけで、その藝術的鑑賞に殆んど不用なものだし、單獨の讀物としてはつまらないものであるから、私はそれを何の惜し氣もなく省略して譯出しなかつた。——そしてたゞ茲に一言云つておきたいのは、作者の序文に詳述してある通り、「死刑囚最後の日」の主題は死刑の廢止といふことである。この死刑廢止の主張は、作者が終始一貫して高唱したもので、其後の作「クロード・グー」や多くの論說の中に繰り返されてゐる。

ヴィクトル・ユゴーは、詩や小説や戯曲や論説など、あらゆるものを書いてゐるが、その中心となるべき心棒は要するに詩人である。彼の戯曲や小説や論説は、彼の持てる詩的熱情によつて生かされてゐるところが多い。彼の生涯を通じての最も大きな努力も、詩作の方面に注がれてゐる。そして詩作だけに止まらない詩人、そこに彼の思想的——理想主義的詩人としての大きな風貌が出て来る。

さて、右の三つのこと、即ち、「死刑囚最後の日」は作者が創作上に油の乗り始めた元氣な時に書かれたものであること、その主題は作者が生涯主張し續ける死刑廢止の問題であること、作者は何よりも先づ詩人であること、それを考へる時に、小説「死刑囚最後の日」が大凡どういふ作であるかは分る。

「死刑囚最後の日」は人を狂氣せしむる作だ、と或る人が云つてゐる。實際そこには、死刑の判決を受けてから斷頭臺に上せらるゝ最後の瞬間に至るまでの、一人の男の肉體的及び精神的苦悶が、微細に叙述され解剖され抉發されてゐる。生きてる首を斷ち切らるゝ、自然から受けた生命を人爲的に奪ひ去らるゝ、その當人の現實的な苦悶が、澹刺とした元氣な筆致で、根深い反撥心で、敏感な熱情で、餘すところなく描き出されてゐる。讀んでゆくうちに、一種の息苦しさを、魂の窒息とでもいふやうなものを、感じさせらるゝ。

随つてまた一方には、純藝術的な豐滿さ、それから来る鑑賞的な餘裕、人心を和らげ人生を明るくする清朗さ、さういふものはこの作からは得られない。そしてこゝまで云つてくると、論文で書くところのものを小説で書くといふことに就ての問題となる。これは重大な問題である。私は茲でそれを云々するのを止めよう。そしてたゞ一言云ひ添へておくだけに止めよう。兎に角「死刑囚最後の日」は、論文で書くところを小説で書いたものとしては、最も注目すべき作の一つである。そして「磔刑臺の代りに据ゑられた十字架」の日が来るまでは、かゝる種類の作品はその存在の理由を有り餘るほど持つてあらう。(豐島與志雄)

二、「エルナニ」

所と人は西班牙に取つてある。

帝位に激しい野心を有つてゐるドン・カルロス王は、自分が想を寄せてゐるドンナ・ソルの愛人エルナニを戀がたきとして敵視する。自分の父を斷頭臺に送つた先王の子として、又戀の邪魔物として、エルナニはカルロス王を二つの立場から倒さんとする。老軀を提げて若者の戀愛合戦に割つて入り、若く美しい許嫁ドンナ・ソルを失ふまいと狂奔する嫉妬深い老公爵ドン・リュイ・ゴメツ・ド・シルヴ。この三人の間に揉まれるドンナ・ソルは、伯父なるドン・リュイの許嫁にされてはゐるが、エルナニを熱愛してゐる。この激しい愛慾の争闘から幕が開かれる――

ドン・カルロスは、エルナニが一時陥つた窮境から救つてはやるが、エルナニに對する敵對的行動は、その帝位に對する野心と共に、増大し、エルナニの組織してゐるアラゴン山岳黨に對してもその絶滅を圖るに至る。

第一幕に於て忠臣として現れたドン・リュイ・ゴメツは、王に追ひつめられたエルナニを徹頭徹尾庇ふ事によつて、自らの武士道をまもりつゝ王に叛き、最後に王がその愛するドンナ・ソルを奪ひ去るに至り、之に復讐を誓ふやうになる。ドンナ・ソルは終始エルナニに對する愛をかへない。富貴と榮譽に守られたる公爵の差しのべる寶石も、西班牙を半ば頌たうといふ王の權勢も、彼女の美しい微笑を得る事は出来ない。却つて、山に野に荒武者共と起き伏しゝて、艱苦の中に燃え立つやうに王の首を狙つてゐるエルナニの許へ走らうとする。

而も第四幕に於て一變した事情は、帝位を得てシャルル五世となつたカルロスをして、エルナニとドンナ・ソルの結婚を許させるに至る。かくして華かなエルナニとドンナ・ソルの結婚式の夜が来る。望み通り帝位を得たドン・カルロス、今や楽しい夢を共に結ぶため、夫婦の室に入らんとする戀人二人、すべては幸福な境涯を享樂するかに見える。

だがその時、今まで忘れられてゐた黒衣覆面の老公爵が、曾て王に追ひつめられたエルナニを救つた時、エルナニが彼になした誓言をもつて、二人の前に現れる。すべてがこゝに至つて急遽な轉回を見せつゝ崩れてゆく。——若い二人が毒を服んで倒れた前に、老公爵も自らその命を絶つ。かうして一切の争闘が終りを告げるのである。

こゝに終始するものは、一本の太い中世の騎士的精神である。勇武と仁侠、純情と清廉、誓言に對する堅い貞節と強敵を見て撓まざる劍の閃光と、自らの敵に對する同情と、かくしてこの劇は、戀愛をその筋の進行に於て波瀾させつゝ、然もその根柢を貫くものは強固なる中世歐羅巴の武士道である。よい意味での封建的意識に浸み込んだ——これは勿論作者の時代に於ける當然の事であるが——作品である。

一八三〇年二月二十五日、テアトル・フランセに於て初めて上演されたる時、古典派と浪漫派が平土間に陣どつて、激しく争論した事は佛蘭西劇場周知のエピソードである。喧騒の中に進められたこの劇は、しかしあらゆる嘲罵と混亂を征服して、佛蘭西浪漫派劇の確かな礎石を作つた。まことに、重疊と重ねゆく筋に對する凡庸ならざる標榜の手腕は、この作者を俟つて初めて可能といふべきであらう。

この譯は比較的短時日の間になされた爲め、考證に於て、或ひは不備な點あるやも知れぬが、翻譯に當つては、全力を盡したつもりである。原書は Ernest Flammarion 版を用ひた。又參考書として、Frederick L. Stouts & Mrs. Newton Cross and 共譯の英譯本を見たが、之は甚だしい誤謬をもつてゐて殆んど益する所なかつた。日本に於ても、ユーゴー全集にも收められた譯があるが、之は粗雑で全然筋さへも判らぬため參考にする事は出来なかつた。その他邦譯の抄譯や續案がある事は聞き及んでゐたが、全然目を通さなかつた。(土井 逸)

目次

第四部 抒情詩と叙事詩(承前)

第十編 千八百三十二年六月五日

- 一 問題の表面……………一
- 二 問題の底……………四
- 三 埋葬——再生の機會……………二〇
- 四 沸騰……………二四
- 五 バリーの特性……………二九

第十一編 原子と暴風

- 一 ガヴロッシュの詩の起原……………三三
- 二 行進中のガヴロッシュ……………三四
- 三 理髮師の至當なる憤慨……………三七
- 四 少年老人に驚く……………三九
- 五 老人……………四〇
- 六 新加入者……………四三

第十二編 コラント

三五

第十三編 マリユス閣の中に入る

- 一 コラント亭の歴史……………三五
- 二 門出の宴……………三九
- 三 グランテールの魔睡……………四六
- 四 寡婦のユシユルーを慰藉す……………五一
- 五 準備……………五四
- 六 待つ間……………五九
- 七 ビエット街にて列に加はりし男……………五九
- 八 ル・カブユクと自稱する男に關す疑問……………六二

第十四編 絶望の壯觀

- 一 プリユーメ街よりサン・ドゥニ街區へ……………六七
- 二 梟の見下したるバリー……………六九
- 三 最後的一端……………七一
- 一 軍旗——第一齣……………七六
- 二 軍旗——第二齣……………八〇
- 三 カヴロッシュにはアンジョーラの短銃が適す……………八三
- 四 火藥の樽……………八四
- 五 ジャン・ブルーヴェールの詩の終り……………八六
- 六 生の苦しみの後に死の苦しみ……………八八

七	距離の測定に巧みなガヴローシュ	一五
第十五編	オンム・アルメ街	六

一	饒舌なる吸取紙	六
二	燈火の敵たる浮浪少年	一四
三	コゼットとトゥーサンとの眠れる間に	一七
四	ガヴローシュの熱狂	一九

第五部 ジャン・ヴァルジャン

第一編	市街戦	一五
-----	-----	----

一	サン・タントアーマとタンブルとの兩防塞	一五
二	深淵中の會談	二三
三	光明と陰影	二三
四	五人を減じ一人を加ふ	二六
五	防塞の上より見たる地平線	二三
六	粗野たるマリユス、簡明なるジャヴエル	二六
七	局面の急迫	二六
八	大砲の眞の偉力	一四二
九	昔の射撃の手腕	一四四

第二編 怪物の内臓

十	黎明	一四五
十一	人を殺さぬ確實なる狙撃	一四九
十二	秩序の味方たる無秩序	一五〇
十三	一閃の光明	一五三
十四	アンジョーラの情婦の名	一五〇
十五	外に出たるガヴローシュ	一五五
十六	兄は父となる	一五九
十七	死せる父死なんとする子を持つ	一六〇
十八	餌食となれる禿鷹	一六六
十九	ジャン・ヴァルジャンの復讐	一七三
二十	死者も正しく生者も不正ならず	一七四
廿一	勇士	一八三
廿二	接戦	一八六
廿三	斷食者と酩酊者との二人の友	一八九
廿四	捕虜	一九三
第二編	怪物の内臓	一九六
一	海に荒さるゝ土地	一九六
二	下水道の昔の歴史	一九九
三	ブリュヌゾー	二〇二
四	世に知られざる事柄	二〇五
五	現在の進歩	二〇八

六 將來の進歩……………三〇九

第三編 泥土にして靈……………三四

一 下水道とその意外なる貰ひ物……………三二四

二 説 明……………三二九

三 尾行されたる男……………三三二

四 彼も亦十字架を負ふ……………三三五

五 砂にも巧みな不誠實あり……………三三八

六 崩 壊 孔……………三三三

七 上陸の間に坐礁することあり……………三三四

八 裂き取られたる上衣の一片……………三三六

九 半死のマリユス……………三四一

十 生命を惜しまぬ息子の歸宅……………三四五

十一 絶對者の動搖……………三四七

十二 祖 父……………三四八

第四編 ジャウエルの變調……………三四

第五編 祖父と孫……………三六六

一 亜鉛の張られたる樹木再び現はる……………三六六

二 マリユス國內戦より出でゝ家庭戰の準備をなす……………三六九

三 マリユス政勢を取る……………三七三

四 フォーシュルヴァン氏の小腋の包……………三七六

五 金は公證人よりも寧ろ森に託すべし……………三八一

六 コゼットを幸福ならしむる二老人……………三八三

七 幸福のさなかに浮びくる幻……………三八六

八 行方不明の二人の男……………三九三

第六編 不眠の夜……………三九七

一 千八百三十三年二月十六日……………三九七

二 なほ腕を吊れるジャン・ヴァルジャン……………四〇五

三 側より離さる物……………四一四

四 不滅の苦悶……………四一六

第七編 苦汁の最後の一飲……………四二三

一 地獄の第七界と天國の第八圈……………四二三

二 語られし祕密の中の影……………四三九

第八編 消えゆく光……………四四八

一 下の 室……………四四八

二 更に數歩の退却……………四五三

三 プリユーメ街の庭の思ひ出……………四五五

四 索引力と消滅……………四六〇

第九編 最期の闇 最後の曙

- 一 不幸者を憐れみ幸者を恕すべし……………三六二
- 二 油盡きたるランプの最後の閃き……………三六四

- 三 今是一本のペンも重し……………三六五
- 四 物を白くするのみなる墨壺……………三六六
- 五 背後に晝を有する夜……………三六六
- 六 草は隠し雨は消し去る……………三六六

死刑囚最後の日

同 序……………四〇二

エ ル ナ ニ (五幕)

- 第一幕……………四〇二
- 第二幕……………四〇六
- 第三幕……………四一〇
- 第四幕……………四一三
- 第五幕……………四一五

レ・ミゼラブル

(第三卷)

ヴィクトル・ユーゴー著
豊島與志雄譯

第四部 抒情詩と叙事詩 (承前)

第十編 千八百三十二年

六月五日

一、問題の表面

暴動の要素は何であるか？ 何もないとも云へるし、あらゆるものだと云へる。次第に發してくる電氣、突然迸り出る焰、彷徨してゐる力、過ぎゆく息吹、などからである。この息吹は、思索する頭、夢想する腦、苦しむ魂、燃え立つ熱情、喚き立てる悲惨、などに出會つて、それらを運び去る。

何處へ？

何處へといふ當はない。政府や法律や他人の繁榮と横暴などをよぎつて、何處ともなく。

苛立つた確信、猛り立つた熱誠、いきり立つた憤怒、抑壓されたる戰鬥的本能、あふりたつ若々しい勇氣、元氣な

盲動、好奇心、變化好き、意外好み、新らしい芝居の廣告を見たがり劇場で舞臺裏の柵の音を喜ぶやうな感情、また漠然たる憎惡、怨恨、落膽、凡て失敗を運命の罪に歸せんとする虚榮、また不快、空想、四方絶壁のうちに閉ざれたる野心、また崩壞によつて何かの結果を望む者、なほ最下層にあつては、火に燃え易い泥炭ともいふべき下層の群集、それらが即ち暴動の要素である。

最も偉大なるもの及び最も下等なるもの、あらゆるものの外部に彷徨しながら機會を狙つてゐる者、浮浪人、無賴漢、街頭の放浪者、空に漂ふ寒い雲のみを屋根として都會の沙漠に夜眠る者、仕事に依らずして行きあたりばつたり日日のパンを求むる者、悲惨と微賤のうちに沈淪してゐる名もなき者、腕を露はにしてゐる者、跣足のまゝの者、それらが暴動に與する人々である。

國家や人生や或は境涯の何等かの事實に對して、ひそかな反抗心を懷いてゐる者は皆、暴動に隣せる者であつて、一度暴動が現はるゝや、身震ひを始め、旋風に巻き上げら

るゝやうな心地を感じ始める。

暴動は社會の大氣中の一種の龍卷であつて、或る氣温の狀態によつて俄に起り、渦卷きながら、上り、翔り、轟き、掴み取り、壊し、潰し、碎き、根こぎにし、自然の偉大なるものを脆弱なるものをも、強き人をも弱き人をも、樹木の幹をも一筋の蘗をも、あらゆるものを卷き込んでゆく。それに引込まれる者もそれに反抗する者も、共に災なる哉である。兩者互に衝突して打碎かれる。

それは己が捉へた者等に異常な力を傳へる。あらゆる者に事變が有する力を充滿させる。凡てのものを爆彈となす。一塊の石をも彈丸となし、一介の人夫をも將軍となす。

狡猾なる政略家等の宣言する所に依れば、政府の立場より見れば多少の暴動は却つて望むところである。その立論は下の通りである。曰く、暴動は政府を顛覆せずして却つて政府を鞏固ならしむる。暴動は軍隊を試練し、市民を結合し、警察の筋力を伸張させ、社會の骨格の力を確める。それは一の體操であり、殆んど衛生的でもある。身體摩擦の後に人が丈夫になるやうに、政府の權力は暴動の後に更に強大になる。

また今より三十年前には、暴動はなほ他の見地からも考察されてゐた。

あらゆる事柄には、「分別」と自稱する一の理論がある。それはアルセストに對するフィラントの如きものである。
〔譯者曰、モリエール作「世間雜ひ」の中的人物〕眞實と虚偽との間に持ち出される仲裁である。説明であり、忠告であり、多少横柄な斟酌であつて、非難と容赦とを交へてゐるので自ら叡智であると信じてはゐるが、多くは半可通にすぎないのである。中正派と稱せらるゝ政治上の一派は、全くそれから出て來たものである。冷水と熱湯との中間のもので、微温湯の類ひである。深遠さを裝ひ、實は皮相にのみ止まり、原因に溯ることなく結果をのみ考察するこの一派は、半可通の學說の高みから、街頭の騷擾を叱責する。

この一派は云ふ。「千八百三十年の事實を紛糾した諸暴動は、この大事變にその純潔さの一部を失はしてしまつた。七月革命は一陣の民衆の風であつて、その後には直ちに澄み渡つた青空が現はれた。然るに暴動は、再びその空に雲を漂はした。初め輿論の一致が特色だつたこの革命を、爭論に墮落させた。あらゆる急激な進歩に見らるゝ通り、七月革命のうちにも目立たぬ挫折の箇所がいくつもある。然るに暴動はそれらの挫折を感じさせた。あゝ此處が碎けてゐる、と人に叫ばした。七月革命の後には、人々はたゞ救はれたと感じてゐた。然るに暴動の後には、人々は

災だと感じた。

「暴動は凡て、商店を閉し、資本を萎靡させ、相場に恐慌を來させ、取引を停め、事業を遲滞させ、破産を招致する。金融は止まる。個人の財産は不安になり、信用は亂れ、工業は脅かされ、資本は回收され、賃金は下落し、到る處恐怖あるのみである。あらゆる都市は皆その打撃を受ける。斯くて破滅の淵が生ずる。計算すれば、暴動の第一日はフランスに二千萬法の損害を來し、第二日は四千萬、第三日は六千萬の損害を來すといふ。三日間の暴動は一億二千萬法の損害となる。即ち經濟上の結果のみを見ても、難破か敗戦の如き災害によつて六十隻の一艦隊が全滅するに等しいのである。

「歴史的に云へば勿論いづれの暴動にもその美があつた。鋪石の戦は逆茂木の戦に劣らず壯烈であり悲壯である。後者には森林の魂が籠つてをり、前者には都市の魂が籠つてゐる。一方にはジャン・シュアンが居り、一方にはジャンヌが居る。(譯者曰、前者は大革命の初期に蜂起せる王黨徒、民の首領、後者は後に出てくる暴動の首領) 従來の暴動は、パリ市固有の極めて顯著なあらゆる特質、即ち、豪俠、獻身、騷暴なる快活、勇氣は智力の一部たることを示す學生、不撓不屈なる國民兵、商人の露營、浮浪少年の要素、通行人等の死を恐れざる心、などを眞赤に而も燦然と照ら

し出した。學校と聯隊とが戦つた。そして要するに、戰士等の間にはたゞ年齢の差があるのみだつた。皆同じ人種であつた。主義のために二十歳にして死ぬ者も、家族のために四十歳にして死ぬ者も、皆同じ堅忍なる人であつた。内亂に於て常に悲しい運命にある軍隊は、慎重なる態度を以て豪膽なる態度に對抗した。暴動は民衆の勇敢さを示すと共に、中流市民に勇氣を教へ込んだ。

「それは宜しい。然し凡てそれらのことは流血に價するものであらうか？ 而も流血に加ふるに、未來を暗くし、進歩を妨げ、立派な人々には不安を與へ、正直なる自由主義の人々には絶望せしめ、他國の專制政治には革命が自ら手傷を蒙つたことを喜ばせ、千八百三十年に敗れたる者等に却つて勝利を得させて、吾々が云つた通りではないか！ と叫びしたのである。パリは恐らく生長したであらうが、然し一方フランスは確かに萎靡したのである。なほ凡てを云ふ必要があるから附け加へるが、その間に爲された殺戮は、猛り立つた秩序が血迷つた自由に對して得た勝利を、多くは汚すものである。要するに、暴動は痛歎すべきものであつた。」

所謂民衆たる市民が喜ぶ所の所謂觀智は、實に右の如く説くのである。

吾人をして云はすれば、暴動といふ餘りに意味の廣い從つて餘りに便利なその言葉を排斥したい。民衆の甲の運動と乙の運動との間に區別を設けたい。一の暴動は一の海戰に等しい損害を來すか否かを問ひたくない。第一何故に戰爭などを持ち出すのか。茲に戰役の問題が起つてくる。暴動が國難であるとすれば戰役は人類に下された天罰ではないか。それにまたあらゆる暴動は皆國難であるか。七月十四日(一七八九年)一日に一億二千萬法の損害があらうともそれが何であるか。スペインに於けるフリッパ五世の擁立は二十億法の損害をフランスにかけた。もし之と同じ損害があらうとも吾人は七月十四日を取りたい。また元來吾人はそれらの計算を排斥したい。それは一見理由らしく見えるけれど實はたゞ口實にすぎない。茲に一の暴動が存する時、吾人は暴動そのものを研究したいのである。上に述べた正理論的な非難のうちには、たゞ結果のみしか問題となつてゐない。然し吾人は原因を探求したいのである。この點を次に明かにしてみよう。

二、問題の底

世には暴動があり、また反亂がある。それは二つの憤怒であつて、一は不正であり、一は正しい。正義を基礎とす

る唯一のものたる民主國に於ても、時として一部が權力を壟斷することがある。その時全部が崛起し、權利恢復の必要上武器を取るに至る。集團の大權に屬するあらゆる問題に於て、一部に對する全部の宣戰は反亂であり、全部に對する一部の攻撃は暴動である。テュイルリー宮殿が王を入れてゐるか或は國約議會を入れてゐるかに從つて、その宮殿を攻撃することが或は正となり或は不正となる。群集に向けられる同じ砲門も、八月十日(一七九二年)には不正となり、共和檔月十四日(一七九五年十月五日)には正當となる。外觀は同じでも根柢は異なる。傭兵等は誤れるものを防護し、ボナパルトは正當なるものを防護した。普通選舉がその自由と主權とを以て爲した所のものは、街頭の群集によつて覆へされることはない。全然文化に關する事柄に於ても同様である。群集の本能は、昨日は清澄であつても明日は混濁することがある。同じ憤激も、テレーに對しては合理でありテュルゴーに對しては不合理である。(譯者曰、前者はルイ十五世の大蔵卿にして不正政略を行ひし人、後者はルイ十六世の大蔵大臣にして大改革を施さんミゼラブル)機械を破砕し、倉庫を掠奪し、レールを切斷し、船渠を破壊し、群集が誤れる途を辿り、民衆が進歩の裁きを拒み、學生等がラミューを殺害し、ルーソーが石を投ぜられてスウィスより追はれる、などは皆暴動である。イスラエルがモーゼに反抗し、アテネ

がフジョオンに反抗し、ローマがスキピオに反抗する、などは皆暴動である。パリーがバステイーユの牢獄に反抗する、これこそは反亂である。兵士等がアレキサンドルに反抗し、水夫等がクリストフ・コロンブスに反抗する、などは皆暴動であり、不信實なる謀叛である。何故かなれば、コロンブスが羅針盤を以てアメリカに對して爲す所を、アレキサンドルは劍を以てアジアに對して爲すのである。コロンブスの如く、アレキサンドルは新世界を發見する。斯く新世界を文化に繋^{つな}ぐことは、光明を増加する所以であつて、それに對するあらゆる抵抗は皆罪あるものとなる。時として民衆は誤つて己に不實となることがある。烏合^{うごふ}の衆は民衆に對する裏切者である。例へばあの鹽密賣者等の長い間に互

る血に塗られたる抗議、慢性的に起つた正當な反抗は、愈最後瞬間に、救済の日に、人民の勝利の時に當つて、それは王位に味方し、シュアーヌリー(譯者曰、大革命の初期に蜂起せる王黨農民の暴動)と變じ、敵せんがための反亂をして味方せんがための暴動たらしめたのであるが、これ以上奇妙な事があらうか。無智の暗い傑作ではないか。この鹽密賣者等は、王室の絞首臺を脱れ、而も首に絞首繩の一片を残したまふ、白の帽草(譯者曰、白は王黨のしるしである)をつける。「鹽稅を廢せよ」の叫びから、「國王萬歲」の叫びを産み出すのである。またサン・バルテル

ミーに於ける虐殺、九月(一七九二年)の斬殺、アヴィニオンに於ける殺戮、コリニの殺害、ランバル夫人の殺害、ブリュヌの殺害(譯者曰、後の三人は皆それと前ミクレール山賊の難、青リボン黨の難、髮黨の難、ゼユの仲間難、小手當の騎士の難(譯者曰、以上は大革命より王政復古の前後に起りし各地の小亂)などは皆暴動である。ヴァンデの亂はカトリック派の大暴動である。)

權利が行動してゐる音は、自らそれと見分けられるものであり、混亂せる群集の震へより常に出づるものではない。世には狂愚なる憤怒があり、破鐘がある。あらゆる警鐘は皆青銅の音を出すものではない。熱情と無智との動搖は進歩の振動とは異なる。蜂起するもよし、然し生長せんがためのものであれ。何れの方角へ行かんとするかを自ら指示せよ。反亂は皆前方へ向つて進むものに限る。その他の蜂起は惡である。暴力的なあらゆる後退は皆暴動である。後退は人類に對する暴行である。反亂は眞理の發作的激怒である。反亂が動かす鋪石は權利の閃めきを迸しらす。然しこれらの鋪石は暴動に向つては泥をしか與へない。ダントンがルイ十六世に反抗するのは反亂であり、エベールがダントンに反抗するのは暴動である。

それ故に、ラファイエットの云つた如く、反亂は至當の場合には最も神聖なる義務となり得るが、暴動は最も痛むべ

き不法行爲となり得る。

また兩者の間には、熱の強度の差も存する。反亂は多く噴火山であり、暴動は多く（わらひ）燬火である。

前に云つた如く、謀叛は時として政府の權力のうちにある。ポリニャックは一の暴動家であり、カミーユ・デムーランは一の統御者である。

時として、反亂は復活である。

普通選舉に依る萬事の解決は全然近代の事實であり、この事實より以前の全歴史は、四千年の昔より、權利の侵害と民衆の苦しみとに満たされてゐるが故に、歴史の各時代には皆當然出るべき抗議がある。ローマ諸皇帝の下には、反亂は存しなかつたが然しジュヴェナール（譯者曰、ローマの諷刺詩人）が居た。憤怒は作る（譯者曰、憤怒は詩を作らるゝ）がグラクキウス兄弟の後を繼ぐ。

諸皇帝の下には、シエーヌの亡命者（ジュヴェナール）が居り、またローマ年代記の作者（タシチウス）が居る。

パトモス島の廣大なる亡命者（ヨハネ）のことは茲に云ふまでもない。彼も亦、現實の世界に向つて理想の世界の名による抗議を浴せかけ、幻覺を以て巨大なる諷刺となし、一種のローマたるニニヴェヤ、バビロンやソドムなどの上に、默示録の燃え立つ光を投げかけてゐる。

巖の上のヨハネは、斷崖の上のスフィンクスである。吾々はその言葉を解くことを得ない。それはユダヤの人であり、ヘブライの言葉である。然しローマ年代記を書いた者は、一のラテン人であり、なほ詳しく云へば一のローマ人である。

ネロの如き皇帝等が闇黒なる政治を行ふ時、彼等はあるがまゝに描寫せられなければならない。筋を刻むだけでは影薄いであらう。その刀痕のうちに痛烈なる散文の精髓を交へなければならない。

專制君主等も思想家にとつては何かの役に立つ。鎖に繋がれたる言葉こそは恐るべき言葉である。君主が民衆に沈黙を強ひる時、筆を執る者はその文體を二重にも三重にも變へる。かゝる沈黙からは或る神祕な充實さが生れて來、やがては思想のうちに激み凝集して青銅の鐘となる。歴史の壓縮は歴史家の文章に簡結さを與へる。或る有名なる散文の花崗石的堅牢さは、暴君によつて爲されたる壓搾に外ならない。

暴政は筆を執る者にその執筆の範圍を縮めさせる。然しそれは却つて力を増させるものである。シセロの章句は、漸くヴェレスに關してのみ十分であつて、カリグラに關しては双が鈍いであらう。執筆の範圍が狭くなるほど、打撃の